

健康文化

我が町

高田 健三

今年の2月の中旬、福岡の友人から珍しく近況問い合わせの電話がかかってきた。当方は、昨年4月以降から、約束事を持たない世に言うところの気ままな人生を始めている。しかし、50年以上も研究教育の場に居たときの生活習慣が抜けきれず、バイオリズムの調整に少しく手間取ったが、それ以外は、幸いに極めて元気にしているという、それを聞いて安心したという。実は、我々の母校、春吉小学校のクラス会をやろうと思っているが、体に不都合があつて、出たくても出席できない人に、淋しい思いをさせることがあるので、呼びかけには気を遣うということであった。大正の世に生まれ、多感な青春時代を昭和の動乱の中に生き抜いてきた我々は、極限状態に強いとはいっても、さすが今の齢ともなると、健康のことが最大の関心事なのである。福岡から一番遠い所に住んでいる君の都合に日時を合わせるのも、是非とも出席して欲しいという。地元では時折気の合った者同士で勝手な理由をつけて飲んでいるらしいが、学会等で訪れることはあつても、クラス会は10数年前、一度出席して以来、今度が二度目になる。殆どのクラスメートが現役を退いている年配に達したので、これからはできる限り遠方にも声を掛けようということであった。生まれ故郷の福岡を離れて60有余年、今でも年賀状を交わす友人も何人かいるが、直接電話を掛けてきてくれる気持ちは嬉しい限りである。

5月の下旬、現在、JRが最速を誇る500型“のぞみ”で博多に向かった。九州方面への旅は、通常空路をとることにしているが、この500型は、名古屋ー博多間(809.9km)を僅か3時間11分で結ぶという。空港へのアクセスや、待ち時間を考えると、飛行機に比べて遜色はない。機会があつたら一度乗ってみたいと思っていたところであった。期待に違わず、スピード感溢れる山陽路の走りは、トンネルの多さを除けば時間を感じさせない快適なものであった。着席姿勢では3時間が限度の私にとっては、九州方面への旅路に選択肢が増えたことになった。その点、10時間前後はかかる海外空路は、いくら座席が良い場合でも、着替えもせずに眠るなどとんでもないことである。しかし、飛行機に代わるこれといった交通手段が見当たらない限り、どうしようもない。最近、

船旅が静かなブームというが、あれは時間のことなど考えず、船旅そのものを楽しむためのものである。

クラス会の席は那珂川を挟んで西側、旧黒田藩城下町、福岡地区の料亭に設けられていた。福岡市といえば、明治22年、福岡と博多の両地区を合併するにあたり、市名をどちらにするかで、大もめにもめたという。その末、市議会は、市名は福岡をとり、市の玄関口にあたる国鉄(現JR)の駅名を“博多”として残すことで市民の合意を得たという。“静”の福岡と“動”の博多が一つに融合したというべきか、粋な計らいである。“民主主義”とかいう名を被った今日の御時世では、やれ住民投票などとひち面倒なことになるのであろう。福岡市生まれの私でも、子供の時から馴染んできた博多という呼び名は、今でも心に響くものがある。先日、駅に着いたとき、あの独特の抑揚のきいた構内アナウンスの、“博多”という呼び声に、ああ故郷に来たのだという思いが湧いてきた。

クラス会には卒業生50名のうち、20名が顔を揃えた。大正生まれという年齢からすると、よく集まった方だと幹事役は喜んでいて、更に、遠方より友来ると迎えられて、宴席を盛り上げるのにいささかでも一役買えたとすれば、来た甲斐があったというものである。みんなよく飲みよく食らいよく喋った。当然のことながら小学校時代の話に花が咲いた。“学校の事件”、放課後のいたずらなど、細かなことまでよく覚えているのには驚かされた。一つのことから次々と話が弾んで童心時代にタイムスリップし、まるで昨日の出来事を話しているような生き生きとした雰囲気にも包まれた。これが中学校以上の上級学校のクラス会になるとそうはいかず、時には妙に苦い思い出を誘うこともある。小学校時代のナイーブな人間関係は貴重なものであることを実感した。その点、早くには幼稚園児の頃から競争社会に放り込まれる今の子供はかわいそうである。ましてや近頃よく耳にする小学校の学級崩壊など、我々時代の人間にとっては、到底理解できない子どもの世界である。

一頻り杯を重ねた頃、誰かが、この間偶然に“あの人”に会ったという話を始めると、何人かが、彼女はどうだったと体を乗り出して、また急に賑やかになった。私には記憶が定かではなかったが、どうやら“あの人”は、同学年の間のマドンナであつたらしい。小学校の頃とは言え、男子の気を引く女の子が居たものである。今日のクラス会に呼べばよかったなど、残念がる者も居た。しかし、面影は残っていたが、余りにもおばさんになっていたという話に、一瞬の溜息の後、それはお互い様で、先方も、どこのおじさんかなどと思ったに違いないということで大笑いになった。じいさん、ばあさんという言葉こそ出なかったが、皮肉にも“今”の己を知らされたことであつた。老人の悲劇は彼

が老いたからではなく、彼がまだ若いところにあるというオスカー・ワイルドの言葉を思い出していた。

賑やかな中にもクラス会はお開きになり、何人かに誘われて二次会に出かけた。博多の中洲街を歩くのは20数年ぶりにもなろうか。昔からあった老舗が店を閉めたとか聞いてはいたが、かつての町人の街の活気は衰えるどころか、ますます盛んになっていた。昼間乗ったタクシーの運転手も、他府県から来る人は皆、活気を肌に感ずるといふ人が多いと言っていたのを思い出した。博多どんたく、博多祇園山笠など、博多っ子の心意気が街一杯に弾け散る興奮は、小さな子どもの心を震わせたものであった。

夜も更けて、ホテルへ送り方々腕白時代の“我が町”春吉町内を案内してくれることになった。私の家族が住んでいた家は、裏が那珂川に面していて、庭先から河原に降りるための石段もついていた。当時の那珂川は、今では想像もつかない程の清流で、鮒、どんこ、川えび、鮎などの川魚は勿論のこと、上げ潮の時には鱒やさよりなどの汽水性の魚も姿を見せて、子ども達にはたまらない遊び場となっていた。当然というか水遊びのため私達兄弟は、ボートが欲しかったが、父は安全性を考えてか小型の和船を選んでくれた。和船といえば櫓であるが、手首の使い方にコツがあって、ボートのオールより難しい。おかげで、子どもの頃から櫓を漕ぐことは得意であった。漁師でもない家に和船があるのは珍しかったようで、一緒に船遊びした当時のことを友人達の方がよく覚えていたほどであった。小学校6年生の時、父の仕事の関係で、東京に移り住んだため、ふるさとは福岡と答えはするが、頭の中では我が町、春吉がその大部分を占めているのである。

理由を言ってゆっくり走ってもらったタクシーの窓越しに我が町が見えた。しかし、家並みのたたずまいは、子ども心に残る原風景とは全く異形のものになっていた。残るものといえば、僅かに昔のままの道巾だけであった。突然ここが君の家のあった“その場所”だと指された所には、街路灯の薄明かりの中、一見それと分かる雰囲気漂う洋風の建物が見えた。瀟洒な建物に見えても、気をつけてみると付近は照明を落としたそれらしいものばかりであった。聞くところによると、川沿いで立地条件がいいこともあって、バブル期を界にして屋敷町は追い出されるように消えていったという。何だか戸籍が消えてしまったような空虚な思いに駆られた。やがて春吉地区を抜けて住吉橋を渡るとき、車窓越しに街の灯を映す那珂川の手が見えた。それを見ているうちに、60数年前の情景が昨日のように蘇ってきたのである。穏やかな川の流れ、様々な表情をした石垣、その上の、それぞれに趣を持つ家々の姿であった。同乗の友人

達は何を思っていたのであろうか、暫しの沈黙が車内を包んでいた。

にわかには街の灯が賑やかになったと思ったら、その先に今夜のホテルが見えてきた。再会の約束をして友人達と別れたのは、夜も12時をまわっていた。枕が変わると寝付きの悪い上に、今日一日、“過去と現在”の間を行き来した思いがして、いささか心が昂ぶっていて眠れそうになかったが、熱いバスに浸ったら体が解れて心地よい眠気に誘われていた。

翌日、帰りの“のぞみ”は比較的空いていた。博多駅を出ると、新幹線は直ぐに内陸部に方向を変え、小倉まではほとんど半分ほどがトンネルのなかである。私の記憶では鹿児島本線の門司―博多間には、今では北九州市にまとめられている小倉、戸畑、八幡、折尾といった大工業地帯が洞海湾沿いに連なっていたのを覚えている。夜汽車で八幡付近を通過する時、線路沿いまで迫る製鉄工場の、大溶鉱炉から覗く真っ赤に燃える銑鉄の焰が顔を照らし、子ども心に恐い思いをしたものであった。現在の沿線風景はどうなっているのだろうか、何となく見たい気持ちに誘われたが、またの機会に譲るしかない。

今度の旅は、久しぶりに子ども時代の記憶を大いにリフレッシュさせてくれた。たまたま家内も、先頃、岐阜市にある小学校の同窓会に顔を出し、遠来のクラスメートとも会えて、結構楽しかったようである。小学校のクラス会は、云い換えれば子どもの町内会の集いみたいなものである。そこには、共通の生活圏で育った者同士が共有する世界がある。街角の彼方に山野を望み、近くに川の流れのある情景の世界なのである。東京の下町育ちはいざ知らず、我々は、そんな風景を目にしていたと思う。昭和の初め頃、春吉小学校の理科の時間には、ちょっと歩けば菜の花や、蝶の観察ができたものである。昭和12年頃、阿佐谷の叔父の家近辺や、吉祥寺あたりには、未だ武蔵野の雑木林の面影が色濃く残っていた。ふるさとという言葉の語感には、そういった自然を思い出させるものがある。

その自然も町並みも、開発や再開発により姿を変えていった。ダム建設により、ふるさとを湖底に失った人もある。曾ての我が町、春吉もすっかり変わり、今や町名に名残を留めるのみとなった。やはりふるすとは、遠きにありて思うものなのであろうか。

(名古屋大学名誉教授)